

# ベルトルト・ブレヒト『アンティゴネ』：翻訳と注釈 (1)

北 野 雅 弘

A Japanese Translation of Bertolt Brecht's *Antigone* (Part 1)

Masahiro KITANO

以下、本年と来年の二度に分けて、ブレヒトの『アンティゴネ』の翻訳及び訳注を掲載する。二度に分けたのは主として紙幅の都合からである。この翻訳は、2020年度群馬県立女子大学特定研究費のテーマである『二十世紀の政治的アンティゴネ』の成果の一部をなす<sup>1</sup>。

## 序劇

ベルリン、1945年4月

夜明け

二人の姉妹が防空壕から家に戻っている

### 姉妹 1

私たちが防空壕から戻ったとき、家はまだ無傷で、朝焼けよりも、向かいの火事で明るかった。最初にそれに気づいたのは妹。

### 姉妹 2

姉さん、どうして入り口の扉が開いてるの？

### 姉妹 1

爆風が外から吹きつけたのでしょうか。

---

1 参照する文献のうち、ソフォクレス、ヘルダーリン、ブレヒトのテキストについては次のように略号で指示し、ソフォクレスとブレヒトについては行番号、ヘルダーリンについては底本に行番号が付加されていないためページ番号を記す。各作品及び行番号、ページ番号の典拠については文献表を参照されたい。

S：ソフォクレス版 H：ヘルダーリン版 B：ブレヒト版

また、翻訳に当たって参照した既訳や文献のうち、次のものは略号で指示する。参照箇所が行番号等で明確な場合にはページ番号は付記しない。書誌情報は文献表に記載。

T：谷川道子訳 I：岩淵達治訳

C：David Constantine 訳（Constantine はヘルダーリン版の英訳も行っているため、この略号はブレヒト版の訳を指す時に用いる。

Ma：Judith Malina 訳

上記以外に、ブレヒト版の底本とした *AntigoneModell* 1948のうち、*Theatermodell* への参照、引用はAMの略語とページ番号を用いた。

ソフォクレス版の翻訳については特に注では付記しなかったが文献表にある拙訳を利用した。

姉妹 2

姉さん、砂埃の中のこの足跡はどこから来たの？

姉妹 1

走って外に出た人のでしょう。それだけよ。

姉妹 2

姉さん、隅の麻袋は一体何？

姉妹 1

何かがある方が、無くなるよりも良いでしょう。

姉妹 2

パンの塊。姉さん、それにベーコン丸まま！

姉妹 1

それは怖いものじゃないわね。

姉妹 2

姉さん、ここにいたのは誰？

姉妹 1

分かる訳もないでしょう。

私たちにご馳走を恵んでくれた人よ。

姉妹 2

でも私には分かる。私たち<sup>うたく</sup>疑りすぎだった！ なんて運がいいの！  
ねえ姉さん、兄さんが帰ってるのよ！

姉妹 1

そして私たちは抱き合って、喜んでいた。

戦争に行った兄さんが無事だったからだ。

私たちはベーコンを切り分けてパンを食べた。

私たちの飢えを満たすために兄さんが持ってきてくれたパンを。

姉妹 2

姉さんがたくさん取って。工場でこき使われてるんだから。

姉妹 1

いいえ、あなたが取りなさい。

姉妹 2

私は少しで良いわ。もっと薄くで！

姉妹 1

私はいいの。

姉妹 2

兄さんはどうやって帰って来られたの？

姉妹 1

部隊と一緒にでしょう。

姉妹 2

いまはどこにいるんだろう？

姉妹 1

戦いのあるところ。

姉妹 2

ああ。

姉妹 1

でも戦いの音は聞こえなかった。

姉妹 2

聞いてはいけなかったのね。

姉妹 1

困らせるつもりじゃなかったの。

黙って座っていると、扉の向こうから、血が凍るような音が聞こえた。

（外から叫び声）

姉妹 2

姉さん。誰か喚いてる。確かめに行きましょう？

姉妹 1

座ってなさい。見ようとする者は見られるのよ。

だから私たちは扉を開けて外で起きてることを見に行ったりはしなかった。

それ以上は食べなかったし、もう目を合わせもせず、喋らず、仕事に行こうとした。いつもの朝のように。

それから妹が皿を片付け、私はふと思い出して兄さんが置いていった麻袋を抱えて兄さんの昔の荷物がある戸棚まで行った。

そしてそこで、心臓が止まるかと思った。兄さんの軍服が吊るされていたから。

ねえ妹、兄さんは軍隊にはいないわ。こっそり逃げ出したの。もう戦場にはいないのよ。

姉妹 2

他の人たちはまだいるけど、兄さんはいないのね。

姉妹 1

だから死刑を宣告された。

姉妹 2

でも逃げおおせた。

姉妹 1

小さな穴があって……

姉妹 2

そこから這い出した。

姉妹 1

他の兵士たちはまだいる、でも兄さんはいない。

姉妹 2

もう兄さんは戦場にはいない。

姉妹 1

私たちは嬉しくて笑った。

兄さんは戦争から逃げた。うまく行ったんだ。

でも私たちはじっと立っていた。血が凍るような音が聞こえたから。

（外から叫び声）

姉妹 2

姉さん、扉の前で叫んでるのは誰だろう？

姉妹 1

あいつらがまた、好きに人を痛めつけてる。

姉妹 2

姉さん、見に行かなくていいの？

姉妹 1

中にいなさい。見ようとする者は見られるのよ。

だから私たちは少し待っていて、外で起きたことを見に行かなかった。

それから私たちは仕事に行かねばならず、扉の前で起きたことを見たのは私だった。

ねえ、大事な妹、外に出てはだめ。兄さんが家の前にいる。逃げ切れずに、肉屋のフックから吊り下がっている。ああ。

でも妹は外に出て見てしまい、大きな叫び声をあげた。

姉妹 2

姉さん、あいつら兄さんを吊るしてしまった。

だから兄さんは私たちに大声で叫んでいたんだ。

ナイフをちょうだい。ナイフを寄越して。

ロープを切って兄さんを下ろすから。

身体を中へ運んで、<sup>さす</sup>擦って生き返らせるの。

姉妹 1

ねえ妹、ナイフは置いておきなさい。

もう兄さんを生きたまま手に入れることはできないの。

兄さんと一緒にいるのをあいつらが見たら、私たちも同じ目にあうでしょう。

姉妹 2

放っておいて。あいつらが兄さんを吊るしたときに私は行ってあげなかったんだから。

姉妹 1

そして妹が戸口を出ようとしたとき、親衛隊員が一人入ってきた。

(親衛隊員が入ってくる)

親衛隊員

外にあれがいて、お前らがここにいるよな？

あれが出てきたのはお前らの家の玄関だ。

ということは、要するに、お前らあの売国奴を知ってるってことだ。

姉妹 1

隊長さん。私たちを裁判所に連れて行ったりしないでください。

その人なんか知らないのですから。

親衛隊員

ならそいつはそのナイフで何をするつもりだ<sup>2</sup>。

---

2 クールでの初演時の台本では、親衛隊員の最後の台詞からが次のようになっていた。

親衛隊員

ならあれはその肉切り包丁で何をするつもりなんだ

姉妹 2

犬畜生、お前にそう答えるのが良いのか？ 兄さんを吊させはしない。お前の戦争から逃げたのだから

## 姉妹 1

それで私は妹を見た。  
妹は、死の苦しみにあうとしても、  
そのとき兄さんを救いに行くべきだったのか？  
兄さんは死んでなかったかもしれない。

## アンティゴネ

（クレオンの屋敷の前）

（夜明け）

## アンティゴネ

（鉄の甕に砂ぼこりを集めながら）

妹、イスメネ、オイディプスの幹から出た二つの枝の片割れのあなた。過ち、悲痛、恥のうち、まだここで生きている私たちに大地の父<sup>3</sup>が引き起こさなかったものを何か知っている？ 長い戦争で、多くの人たちの一人として、エテオクレス兄様は斃れた。独裁者の遠征の中で彼は若くして斃れた。そして、その弟のポリュネイクス兄様は、兄が馬の蹄に踏み潰されるのを見た。兄様はまだ終わっていない戦場から泣きながら逃げ出したの。強く興奮した戦さの神が右手で激しく揺さぶるとき、その下す定めは人によって違う<sup>4</sup>。急いで逃げ出した兄様は、ディルケの小川を渡ると安堵の息をつき<sup>5</sup>、七つの門を持つテバイを目にした。そこで兄様の血に塗れたクレオン、全兵士を後ろから鞭打って戦場へ追い立てたあのクレオンが兄様を捕らえ、八つ裂きにした。

この話は聞いた？ それとも、消えつつあるオイディプスの子供の身の上はまだ何が積み重なるのかは聞いていない？（1-20）

## 姉妹 1

そしてあいつが妹に手を伸ばしたとき、あの子は怯まなかった。あいつにナイフを突き立てたとき、私には妹が愛おしかった。

3 ソフォクレスでは「ゼウス」(S2)。ブレヒトはヘルダーリンの“Feldherr” (H223) を使用。

4 コロスのパロドスでのアルゴスの將軍たちの運命についての記述、「他の者どもは、頼りとなる助け、偉大なるアレス様が打ちのめし、それぞれに違う死の定めを与えた」(S137-139) のヘルダーリンの翻訳“*Anderes andrem / Bescheidet der Schlachtgeist, wenn der hart/Anregend einen mit dem Rechten die Hand erschütteret.*”（戦さの神が怒り狂い、右からその手を強く揺さぶるとき、そのもたらす定めは人によってちがう）をそのまま使用したが、極めて曖昧な文になったと Weisstein (1988) 592は指摘する。彼は、四頭立て馬車競技で一番負担がかかる右側の馬を表し、そこから「頼りとなる」を意味する *δεξιόσειρος* を、ヘルダーン<sup>6</sup>は誤って「右側 (*δεξιός*)」と「揺り動かす (*σειώ*)」の合成語と考えたという、Reissner によるヘルダーリン全集版 (*Große Stuttgarter Ausgabe V*) 487の指摘を紹介する。ただし、スコリアが支持する *δεξιόχειρος* (右手の→強い) を採用する底本に従っていたのかもしれない。ソフォクレスでの *δεξιόσειρος* の意味及び *δεξιόχειρος* の異読については Jebb (1900) 36参照。

その経緯を除外してこの行を見ると「正しき報いをもって手を揺さぶる」と解しうる。T, I は共に *erschütten* を肯定的にとらえ、「正しい者に戦いの神が手を差し伸べて奮い立たせる」と理解する。C, Ma は否定的で、C は *smashes* (打ち砕く)、Ma は *unnerves* (力を奪う)。ブレヒト版で、戦場から逃亡したポリュネイクスの死をイスメネに告げるまさにこの場面で、アンティゴネが「戦さの神」に肯定的な評価をしているとは考えられない。

5 ソフォクレスの「ディルケ川の流れを超えてお見えになった」(S104) からの借用。もともとはパロドス (入場歌) におけるコロスによる朝日についての描写。Flashar (1988) 397参照。

## イスメネ

広場には行っていないの、アンティゴネ姉様。愛しい人たちについてのそれ以上言葉は聞いていない<sup>6</sup>。嬉しい言葉も悲しい言葉も何一つ。だから前より幸せでもないし不幸でもないの。(21-24)

## アンティゴネ

では私から聞きなさい。心臓が鼓動を止めそうになるのか、不幸の中でもっと激しく鼓動するのかわせてちょうだい。(24-27)

## イスメネ

姉様は砂を集めながら、言葉で私を赤く染めているみたい<sup>7</sup>。(28-29)

## アンティゴネ

こう言うこと。

私たちの兄様は二人とも、遠いアルゴスの灰色の鉱山のためにクレオンが起こした戦争に引きずり込まれた。二人とも殺された。でも二人ともが土に覆われるわけではないの。戦いを恐れなかったエテオクレスは、しきたり通りに花冠で飾られ埋葬されるとのこと。ただしもう一人、惨めに死んだポリュネイクス兄様の遺体については、決して墓で覆っても弔ってもならぬ、嘆きも墓もなく野ざらしにし、秃鷹の甘い餌にせよとの布告が<sup>8</sup>に出されたとの話。おまけに、何であれそうしたことを行なった人間は石打ちの刑に処すとのこと。さあ、言ってちょうだい。あなたはそれでどうするの？ (30-43)

## イスメネ

なに、姉様、私を試してるの？

## アンティゴネ

あなたが助けてくれるかどうかをね。

## イスメネ

どんな危険を冒すつもりなの？

## アンティゴネ

兄様を埋葬する。

## イスメネ

国が見放した人を？

## アンティゴネ

国が拒んだ人を。

## イスメネ

反逆者なのよ！

## アンティゴネ

そう、私には兄様。あなたにもね。

## イスメネ

6 T, Iは「親しい人たちからの言葉」と解するが、ここもヘルダーリン訳からの引用であって、ソフォクレスにおいてと同様、「愛しい人たち」はポリュネイクスとエテオクレスを指す。イスメネは広場には行っておらず、それゆえ、彼らの消息について何も知らない。

7 B8-29はH224に mir(私を) を加えている。S20は「思い詰めた不吉な言葉 (καλχαίνουσ' ἔπος)」だが、καλχαίνω は字義通りには「紫に染める」。Flashar (1988) 398参照。

8 プレヒトはほぼ一貫して Stadt (市) を用いるが、ギリシアが都市国家であることを考慮し特に市街を意味する場合以外は「国」とする。

姉様は法に背いた科<sup>とが</sup>で捕まってしまうわ。

アンティゴネ

でも、誠に背いた科で捕まるわけではない。

イスメネ

呪われた人。姉様は私たちオイディプスの末裔<sup>すえ</sup>すべてを破滅に追い落とすつもりなの？ 過ぎ去ったことは放っておきましょう。

アンティゴネ

あなたは私より若い。恐ろしいことも私ほど見ていない。放っておかれた過去は過ぎ去らずに残るのよ。(50-61)

イスメネ

今から言うことも考えて。私たちは女だから、男と争うなんて許されない。そんなに強くないのだから。だからこのことでも、それよりずっと酷いことでも服従するの。だから地下に閉じ込められている死者たちには、私を許してくれるようお願いする。暴力が私に向けられているのだから私は支配者に従う。無駄なことをするのは愚かだもの。(62-69)

アンティゴネ

もうあなたには頼まない。命令してくれる人間に従い、命令されたことをなさい。でも私はしきたりに従い兄様を埋葬する。それで死ぬとして、だから何なの？ 静かな死者と静かに横たわりましょう<sup>9</sup>。神聖な仕事を成し遂げたのだから。それに、地下である人たちと過ごす時間の方がここで過ごすよりも長い。地下では永遠に暮らすことになるのだから。でもあなたは、恥辱を笑って生きて行きなさい。(70-79)

イスメネ

アンティゴネ姉様、ひどい<sup>10</sup>恥辱を耐えるのはたしかに辛いこと。でも塩の涙にも限りはある。枯れ果てずに涙が目から流れることなどないの。斧の鋭い刃は甘い人生を終わりにするけれど、残された人間には苦しみの血管を開く。嘆きの叫びを中断することは出来ないけれど、それでも、泣き叫びながらも、鳥の羽音が上から聞こえる、涙のベールを通して、故郷の古い榆の木と屋根が見えてくる。(80-89)

アンティゴネ

憎らしい。滅ってゆく悲しみをしまい込んだ穴だらけのエプロンを、恥ずかしげもなく私に見せつけるの？ 肉親の肉体が、大空を飛ぶ鳥のために剥き出しの石の上で晒しものにされているというのに、でもそれはあなたには昨日のことなんだ。(90-95)

イスメネ

私は、抗って身を投げ捨てるほど善人じゃないだけ。無器用で、でも姉様を心配している。(96-98)

アンティゴネ

忠告なんかしないで！ 自分の命を大事にしてなさい！ ただ邪魔はしないで。身内が名誉を汚されたとき<sup>11</sup>、私は少しでもできることをしてそれを守る。私は自分が、そもそも見苦しい死に方

9 S73, H226とも「愛する者として、愛する人と共に横たわる」。B版は意味を持たないと Flashar(1988) 398は指摘する。

10 T, Iは wilde (B80) が Antigone を修飾するとみなす。

11 Meines ehren (B100), T, Iはアンティゴネ自身の名誉とみなす。

に耐えられないほど傷つきやすいわけじゃないと思いたい<sup>12</sup>。

### イスマネ

でしたらその砂を持って、行ってください。姉様の言葉はまともじゃないけれど、愛する人への愛の言葉なんだから。(99-105)

(アンティゴネは甕を持って退場。イスマネは家に戻る。長老たちが登場)

### 長老たち

大略奪の勝利がやって来た。  
戦車の溢れたテバイに微笑んだ。  
この地の戦争は終わった、  
忘れよう！  
あらゆる神々の神殿で  
一晩中歌って踊ろう。  
さあ集まれ！ そしてテバイよ、  
月桂樹を纏った裸体を揺らし、  
パッコス舞が支配せんことを<sup>13</sup>。(106-113)

だが、勝利をもたらした方<sup>14</sup>、  
メノイケウスの子クレオン様が、戦場から急ぎお戻りだ。  
戦利品と兵士たちの最終的な帰還をお告げになるために。  
そのためにクレオン様は我ら長老を呼び寄せ、  
集まるようにとのご指示だ<sup>15</sup>。(114-118)  
(館からクレオン登場)

12 S96-97の「美しく死ぬこともできないほどの酷い目にはあわないでしょう (πείσομαι)」が H227で「見苦しい死を迎えることになるほど私は感傷的 (Empfindsam) ではない」と訳され、さらに、ヘルダーリンの *soll* (迎えることになる) をブレヒトは *nicht können* (迎えることができない) に変えた。ギリシア語の *πάσχω* は受動的経験そのものとその結果生じる感情の両方を意味するが、*empfindsam* は英語の *sentimental* の訳語として導入された言葉で、感情のあり方を示す。

13 S147-154, H229。但し、S147の「栄光をもたらす勝利 (Der großnamige Sieg)」は「大略奪の勝利 (Der großbeutige Sieg)」に変更されている。防衛戦争だったソフォクレス版とは異なり、ブレヒト版のコロスは冒頭から侵略戦争に熱狂している。「忘れよう！」はのちのアンティゴネの「忘れてもらえるとは思わないことね (sei's nicht vergessen)！」(B428) に呼応する。

14 ソフォクレスではコロスはクレオンを「王 (βασιλεύς)」(S155) と呼んでいるが、ブレヒトは一貫して「王」の呼称を避けている。ソフォクレスでもアンティゴネはクレオンを「王」とは呼ばない。このことは、クレオンの玉座そのものの正統性をアンティゴネが認めていないことを含意する。クレオン自身が、自らが王権を得たのは「死んだ二人の最も近い血縁」だったためだと述べており、それ故、血縁を蔑ろにするクレオンの玉座の正当性を認めないことには一定の根拠がある。他方、ブレヒトは番兵にクレオンを「我が総統 (Mein Führer)」(B186) と呼ばせることでドイツの独裁体制との関連を暗示する。本訳でもクレオンへの「王様」という表記は避ける。クレオンに対する呼びかけの *Herr* は「閣下」とした。

15 コロスを構成する *die Alten* (B118, H229) は「長老」とするが、AM (89) に指摘されるように、1948年の上演では老人としては描かれなかった。ただし、すでに白髪であることは「私の髪がまだ黒かったとしても」(B1017-1018) から分かる。ソフォクレスでは、「私が頭にいただく髪が黒から白に



## クレオン

諸君、皆に伝えよ、アルゴスはもう存在しない。決着はついた。十一の地区から逃げ出したものは少数、ごく僅かだ！

テバイよ、君について言われることだが、君は幸運を直ちに二倍にする。不運は君を挫かず、不運の方が挫けるのだ。君の槍の渴きは最初の血を啜って癒えたが、繰り返し啜ることは拒まなかった。テバイよ、君はアルゴス人どもを、荒れた寝床に寝かしつけた。君を嘲<sup>わら</sup>った奴らは、今は国もなく墓もなく、野原に倒れておる。君が目を向けるのは、かつて奴らの国があった場所、君が見るのは目をぎらつかせた犬ども。気高き秃鷹が飛びかかり、死骸を次々と跳び移り、準備された豊かな食事に腹を満たし、高く飛び立つことができぬほどだ<sup>16</sup>。(119-138)

## 長老たち

閣下、凄まじき有様の麗しき絵図をお描きです。賢くも閣下がもう一枚、我らが略奪品で満たされた車列が街路を進む様を付け加えてくだされば、それを伝えられた国は満足するでしょう。(139-142)

## クレオン

直ぐだぞ、友よ、直ぐだ！ だがまずは仕事だ！ 諸君は、儂が剣を神殿に納める<sup>17</sup>のをまだ見てはいない。つまり諸君を呼び集めたのには二つの理由がある。

第一に、敵を踏みじめる戦車の車輪の数を戦さの神に数えなくてはせず、子息らの血を戦場で惜しみもしていないことを儂は承知しておる<sup>18</sup>。だがな、神が兵力を減らして自らを安全に保護してくれる屋根の下へ戻るときには、市場では数多くの計算がなされるのだ<sup>19</sup>。だから一刻も早く、テバ

---

変わってからこちら、あの人（ティレシアス）が国に対して偽りを喚きたてことなど一度もない」（S1092-1094）と述べているので、かなりの老人を念頭に置いている。

16 クレオンの最初の語りには、ゲーテの『西東詩集への注記』に引用されているアラビア詩が利用されている。以下、ゲーテ(1962)275-278の小林健夫訳による関連箇所を示す。

17連「みなが、ぞんぶんに仇を討った。／二家のやからで、逃げおおせたのは、／ほんのわずか、／いうにも足りぬ。」

21連より「不幸がおれをへたばらすどころか／不幸の方がへたばった。」

22連「槍の渴きは／最初一杯で癒え／なおそのうに飲むことも／否まれはしなかった。」

27連より「狼どもも、おまえは見たろう、／眼をかがやかせていたぞ。」

28連「高い身分のはげたかも飛んできて／死体から死体へとわたりあるき、／ふんだんな馳走をくらって／飛び立つこともできなくなった。」

17 終戦記念に剣をマルスの神殿に納めるローマの風習を前提としている。I 49n (21)、Flashar (1988) 399.

18 “Ihr rechnet nicht dem Kriegsgott die Räder nach Am feindzermalmenden ’Wagen, noch geizt ihm Das Blut der Söhne im Kampfe,” (B146-148). Tは「代金の収支をないがしろにし」「息子たちの血も、出し惜しんでおる」Iは「戦車の代金を戦さの神に支払っていない」「息子たちの血も惜しんで十分に捧げしていない」と訳し、クレオンにコロスを非難させる。しかし、「車輪の数を数えず」は、戦費を気にせず総力戦を行なう比喩であり、後半部分は nicht ~ noch の構文で「血を惜しまない」である。この文脈ではクレオンはコロスに対し敵意を示していない。むしろクレオンはコロスをここでは目的を共有する臣下として捉えている。クレオンがコロスに脅迫的になるのはアンティゴネが彼らに訴えかけを行なったときである。

19 T「戦さの神が弱りはて、敗けて」は敗戦を含意するが、勝ち負けにかかわらず、戦後に戦費の収支計算がなされることを意味している。

イ兵の失われた血はこうした場合の通例を超えるものではないと儂に伝えてくれ。

それからもう一つ、例によってテバイ人は自らが救われたとなればあまりに簡単に敵を許す性質だからな、喘ぐ帰還兵たちの汗を拭おうと押し寄せて来て、それが勇猛に戦った者の汗なのかそれとも敵前逃亡の塵に塗れた冷や汗なのかは取り立てて気にせぬのだ。だから儂は、諸君にも承認してもらおうが、国のために死んだエテオクレスは花輪を飾った墓に葬る。だが弱虫のポリュネイケス、エテオクレスと儂の身内でありながらもアルゴス人どもの友でもあるあの男は、やつら同様埋めずに捨て置くのだ。

やつら同様あいつは敵であった。儂の敵でありテバイの敵であった。しかるが故、儂は、あれが埋められず晒され、剥き出しの餌になり、鳥と犬に貪り食われるのを誰も悼むことのなきよう求める。祖国よりも命を大事にするような奴はクソの値打ちもないからな。我が国のことを想うものは、死んでいようが生きていようが、どちらであっても儂の称賛をえよう。これが儂の望みだ。諸君は承認してくれ。(143-172)

長老たち

承知いたしました<sup>20</sup>。

クレオン

では今述べたことの監視役になってくれ。

長老たち

その任務には若い者をおつけください！

クレオン

そうではない。外での死骸の監視はすでに配置しておく。

長老たち

では我らは生きている者の監視でしょうか？

クレオン

そうだ。不満を持っている連中がおるからな。

長老たち

好んで死ぬような間抜けはここにはおりません。

クレオン

表立ってはな。だが、斬り落とされるまでは首を横に振り続ける<sup>21</sup>輩も多い。だからこそその布告であるが、残念ながらまだ足りぬ。国は浄化せねばならん……(173-184)

(見張り登場)

見張り

総統閣下！ 閣下にこの知らせをいち早くお伝えしようと、息を切らせ、急いでまいりました<sup>22</sup>。なぜもっと早くこないのだとのお尋ねはご勘弁ください。私の足は頭より前に出ておりました、いや、頭が足を引っ張っていたのかも。そう申し上げるのも、私は、炎天下息もつかずにどこへどれ

20 ソフォクレスのコロスよりもプレヒトの長老たちはクレオンに同調的である点を Flashar (1988) 399 は指摘する。

21 ソフォクレスで、見張りに対してクレオンが語る「きちんと軛に繋がれておらず、こっそり首を左右に振るしつけの悪い馬」(S291-292, H235)は、「首を横に振り続ける」(B182)と「軛に繋がれていても頭を下げぬ」(B231-232)に分割されている。

22 ソフォクレスでもヘルダーリンでも「息を切らせ、急いできた、とは言いません」(S223-224, H232)。

だけ進むにせよ、ともかく急いでまいりました。

**クレオン**

なぜそれほど息を切らしている、いや、何をそんなにぐずぐずしている？

**見張り**

隠し事は何もしておりません。自分が下手人でもないのに自由に申し上げない理由などありませんか、と申し上げます。それでも存じ上げないのです。つまり、誰が閣下に大それたことをしたのかを私は知りません。これほど何も知らない人間に対して厳しいお裁きがあればがっかりであります。

**クレオン**

用心は立派だな。おのれの非行をやってないと言うのに熱心な伝令だが、足が速いと褒美でも求めておるのか。

**見張り**

閣下。

閣下は見張りに大それた仕事をお命じでした。ですが、大それた仕事には多くの努力が必要です。

**クレオン**

なら直ちに喋ってまた戻れば良い。

**見張り**

では直ちに申し上げます。死んだ男をたった今、誰かが埋めて行きました。そいつは、禿鷹が見つげ出さないようにと、死体の表面に砂を振りかけて逃げ去ったのです。

**クレオン**

何を言っておる？ 誰の仕業だ？

**見張り**

存じません。現場には鍬をふるった跡も鋤で掘り返した跡もありませんでした。地面は平らで轍もありません。下手人<sup>23</sup>は痕跡を残していないのです。墓標などはなく、ただ砂が薄く、まるで布告を憚り<sup>24</sup>、砂をそれほど持ってこなかったかのようにでした。獣の足跡も、食い散らかしに来た犬の足跡もありません。日の出とともにその様子を見て、皆がぞっとしました。そしてそれを総統閣下にご報告する籤を私が引き当てたのです。悪い知らせをもたらす伝令など誰も好みませんから。

**長老たち**

メノイケウスの子クレオン様、これは何か神様の行いではないでしょうか？

**クレオン**

やめよ<sup>25</sup>。これ以上儂を怒らせ、神々が、御自らの神殿の列柱と供物とを冷酷にも穢したこの卑怯者を嘉するなどというな！ いや、儂に悪意を持ち、不満を広めている連中がこの国にはおる。そいつらは軛に繋がれても儂に頭を下げぬ。そいつらが賄賂を渡してこれをさせたことなど重々承

23 ヘルダーリンの誤訳「名人は跡を残さなかった (Zeichnlos war der Meister)」(H234) をソフォクレスのギリシャ語 (ἐργάτης S252) に合わせて「下手人 (Täter)」としている。Flashar (1988) 399参照。

24 ソフォクレスでは「穢れを避けるかのように」(S256)、ヘルダーリンは砂をかけた人物が「禁止を憚ったかのように (Verbot gescheut)」(H234) ととらえるが、ブレヒトの「布告を憚り (Gebot gescheut)」(B217) の含意は明確ではないと Flashar (1988) 400は指摘する。

25 ブレヒトにおけるクレオンの怒り (B227-245) はヘルダーリンのテキスト (H235-236) に若干の変更とかなり省略を施した引用。また、ヘルダーリンの翻訳自体がソフォクレス (S280-312) のかなり自由な翻訳になっている。

知である。

刻印を押されたもののうち、銀貨ほど悪いものはない。これが国全体を喰し、男どもを家からおびき出し、神を恐れぬどんな仕業でも教え込む。だが知っておけよ、この世で生きたまま板に縛りつけて下手人を儂のもとに連れてこないなら、お前が吊るされ、首に縄を巻いたままあの世に行くことになる。そうなればお前は、稼ぎをどこから獲れば良いのかもわかるし、奪い取った物を互いに遺したところで、なんでも儲けの種になるわけではないと気づくだろう。(227-245)

#### 見張り

閣下、私のようなものには怖がらねばならないことは多いです。閣下はあの世行きを当て付けられました、あちらへ行き着く道は多すぎるのです。

私が今この瞬間に怯えているのは、銀貨を稼いだといわれているからではございません。それが怖くないとは申しませんが、そう思し召しでしたら財布を二度ひっくり返して、何か入っていないかお見せします。私が怯えているのはそれよりも、言い返したらお怒りを買うのでは、ということです。さらにもっと怖いのは、下手人探しのご褒美が麻縄になるのかもしれないことです。高貴な方からの私のような者へのご褒美は銀貨よりも縄が多いのです。お分かりいただければ幸いです。(246-257)

#### クレオン

見えすいた奴だな。謎かけでもしてるのか？

#### 見張り

身分の高い死人には身分の高いお友達がいらしたのでしょうか。

#### クレオン

高くて届かないなら足首にでもしがみつくとこだ！ 不平分子がそちら側だけでなくこちら側にもいることは知っておる。我が勝利に喜び震えているかのように見せて、その実不安に駆られて一目散に月桂冠を被せにくる連中は多い。そいつらは見つけ出してやる。

(館の中へ退場)

#### 見張り

ここは身体に良くない場所だ。身分の高い人間が互いに毛を筆りあっている。だが俺はまだくたばっていないようだ。びっくりだな。(258-264)

(退場)

#### 長老たち

凄まじきものは数多あるが  
人より凄まじきものはない。  
人は、海の夜の彼方へ  
冬、南からの風が吹く中  
翼持ち唸りをあげる家で<sup>26</sup>  
乗り出して行く。  
天上の神々の中でも気高き大地の女神、  
滅びも疲れもない大地すら  
人は毎年毎年、弛むことなく  
鋤を用い馬の種族を

26 風を受けて帆をはためかせる帆船の隠喩。

追い立てて傷つける<sup>27</sup>。(268-278)

軽やかな鳥の類、  
野生の獣たちは、  
罠にかけ、狩り、  
海の塩水に暮らす生き物たちには、  
巧みに巻かれた縄を用いる  
知識ある人間。  
山をさすらい夜を過ごす  
獣たちをもたくらみにて捕らえ、  
粗きたてがみを持つ馬も、  
山をへ巡る野生の牛も、  
首の周りにくびきをかける<sup>28</sup>。(290-299)

人は弁論と、  
軽やかな心の飛翔と  
国を治める法を学び、  
災いをもたらす丘からの湿り気、  
降り注ぐ雨の矢を逃れる術も学んだ。  
万事に通じるが何も知らぬ。何も成し遂げず。  
何事にも策を知り、  
策無くして向かうことはなし<sup>29</sup>。

27 ソフォクレスでコロスの第一スタシモンを成す所謂「人間讃歌」(S332-383)は四連(第一ストロフェー(S332-342)、第一アンティストロフェー(S343-352)、第二ストロフェー(S353-363)、第二アンティストロフェー(S363-375))から構成されている。ブレヒト版では、第一ストロフェーは基本的にヘルダーリン(H238-239)の借用だがRossengeslecht(H238)をGäulegeschlecht(B278)に変えた。ソフォクレスにおける「馬の子(ἵππειο γένει)」(S341)のγένοςはここでは「子」を意味し、騾馬を指す婉曲表現だが、ヘルダーリンは「種」を意味すると考えた。ヘルダーリンのこの語の使用には彼の「俗語(Volksgestus)」愛好があるとしばしば指摘される。e.g. Weissstein(1973) 587。ブレヒトのGäuleは、農耕馬を含意するためソフォクレスの文脈により適っている。

28 第一アンティストロフェーも同様にヘルダーリンを借用するが、「軽き思慮の鳥族」(S341-342)「軽き思慮の鳥の世界」(H238)が「軽やかに作られた鳥類」(B279)へ、「野に住まう獣の種族」(S343)がヘルダーリンの「野生の獣の群れ(wilder Tiere Zug)」(H238)を経て「野生の獣たち(wilder Tiere Volk)」(B281)に、「巻き網を投げて(Mit gesponnenen Netzen)」(S345, H238)が「巧みに巻かれた縄で(Mit listig geschlungenen Seilen)」(B283)とヘルダーリンのテキストを変更している。

29 第二ストロフェーの前半は、「町を治める気概(ἀστυνόμους ὀργάς)」(S345-346)(Stadtbeherrschenden Stolz)(H238)が「国を治める法(staatordnende Satzung(B291))」に変更された。また、ソフォクレスの「晴れた夜空に、眠れるほどに凍てつく霜も、嵐の中、矢のごとく降り注ぐ雨も、避ける術を学んだ」(S344-346)がヘルダーリンで、「悪しきものの住う丘の湿気も、不運なる矢も、逃れる術を学んだ」(H239)と、矢が雨の比喩であることが定かでない翻訳になっていたのを明確にした(B292-294)。

興味深いのは「万象に策を用いる。先に何があらうとも、決して無策のまま向かいはいはしない(παντοπόρος ἄπορος ἐπ' οὐδὲν ἔρχεται τὸ μέλλον(S360-361))」を「万策に通じるが何も知らぬ。何も成し遂げず

越えられぬ線はないが、  
 限度は定められている<sup>30</sup>。(300-310)

すなわち、己の敵がいなるとき、  
 人は自らを敵とする。  
 人は雄牛だけでなく同胞の首をも撓めるが、  
 同胞は彼の腸を引きちぎる。  
 我先に同類を踏みつける。  
 一人では腹も満たせず、  
 なのに持ち物は壁で囲う。  
 壁は取り壊さねばならない！  
 屋根が開いて雨が降り込んでいるのだ<sup>31</sup>！  
 人は人らしくあることに重きをおかぬ。  
 だから、人には人が凄まじい<sup>32</sup>。(300-310)

なんという神の誘惑が我が目の前にあることか、見知っている、それでもこれがあの娘、アンティゴネでないと言うべきなのか。不運な父親オイディプス、その不運な娘よ、国の布告に抗ったあなたを、何がどこへ連れて行くのか<sup>33</sup>？(311-317)

(見張りがアンティゴネをひき連れて登場)

## 見張り

この娘です。これがやりました。墓を盛ろうとしていたのを捕まえました。

---

(Allbewandert./ Unbewandert. Zu nichts kommt er.)」(H239) とピリオドをつけ意味を逆転しているヘルダーリン訳を使用した上で、Überall weiß er Rat/ Ratlos trifft ihn nichts. (B296-297) とソフォクレス版に対応する文を付け加えている点。I は「すべてに精通して／なおも無知で未到達だと思ふ。／すべての方策を知り／対処の術を心得ぬものなどない。」とする。Lehmann (2015) 10参照。ただし、これはドイツ語ではピリオド一つの効果なので、舞台上聞き取れるかどうかは疑問が残る。

30 第二ストロフェーの後半からブレヒト独自のテキストになる。人間の知識を超えられない境界はないが、だからと言って人間にできることが無限であるわけではない。限界は人間社会のあり方にあるとブレヒトは考える。

31 「壁」は同じ人間を遮るものであり、「屋根」はより自然の暴力を遮るものを指すと解する。屋根がなく雨晒しであるのに、他の人間に対しては「壁」で守ることの愚かさを指摘しているのだろう。

32 第二アンティストロフェーで、人間の凄まじさは、ソフォクレスでは、人間の優れた知恵が、「あるときは悪へ、あるときは善へと向かう」(S365) 点に認められている。他方、ブレヒトは、他人を踏みつけにし、自分が得たものを独占しようとする欲望にそれを認める。スタシモンでコロスが示す賢明さと対話部分での愚かさとは特に調停する必要はないと AM89 は注意している。瀬野 (2000) は「ここで歌われる争いというのが序幕や上演された時代から先の大戦を指すことは明らかである」(22-23) と主張する。ブレヒト版『アンティゴネ』は全体がナチス・ドイツの暴虐と侵略を暗示する作品であるが、ここで、「人間」全般に拡大して語られている内容は、私有財産と資本主義そのものの問題を端的に表している。彼女の読解は、侵略戦争への抵抗を「戦争への非難」(19) 一般に拡張しているように思われる。Lehmann (2015) 10参照。

33 ヘルダーリン訳 (H242) を最後の行以外ほぼそのまま用いている。ただし「王の定め (Den königlichen Gesetzen)」は「国の布告 (Der Staatlichen Satzung)」に変更された。

だがクレオン様はどちらで？

長老たち

いま館からこちらへお戻りだ。

（家からクレオン登場。）

クレオン

どうしてこの娘を連れてきた？ どこで捕まえたのだ？

見張り

墓を盛っておりました。全てご承知の通りでございます。

クレオン

その娘は誰だ？ お前はなぜそやつの顔を隠しておる？

見張り

恥のためです。この娘が下手人ですから。

クレオン

言っていることは分かる。だがお前は自分で見たのか？

見張り

この娘が、閣下の禁じられた墓を盛っているのを見ておりました。

運が良ければ、すぐにはっきり分かるものです。

クレオン

では報告しろ。(318-326)

見張り

次のような次第でございました。閣下に酷く脅されて御前を離れてから、私どもは砂を死体から拭い取り、腐るがままに放置しました。死体が放つ悪臭が酷くなり始めたので、それを避け、空気が通う小高い丘に腰掛けたのです。眠りそうになったらあばらの辺りを肘で突こうと取り決めていました。突然、私たちは目を見張りました。つまり、突然、暖かい風が地面から霧を渦巻きのように浮き上がらせ、谷を隠し、谷間の森を髪の毛のように囲う木の葉を引き裂き、大気は木の葉で満たされ、私たちは目を細めて瞬きをせねばならず、そして目を擦るとこの娘が見えたのです。娘は突っ立って甲高い声で泣いています。まるで、ひなが消えて巣が空なのを見た母鳥が悲しんでいる、そんな風に娘は嘆くのです。そして、死体が剥き出しなのを見てもう一度砂を集めて上に被せ、鉄の壺から三度に分けて供養の水<sup>34</sup>を注ぎます。直ちに駆けつけて娘を捕らえましたが、娘は驚いた様子はありません。私どもはいま見たことについても前に起きたことについても娘を尋問し

34 ソフォクレスの「供養の飲み物 (χοῦσις)」に対するヘルダーリンの訳語 *Ergießungen* (H242) を利用。

T, I, Ma は「砂を振りかけた」と解する。C は “watering”。ソフォクレスではアンティゴネは「両手で乾いた砂を運んでくると、立派な作りの青銅の水差しを高く掲げ、死体の周りに供養の飲み物を三度注ぎかけた」(S429-431) であり、壺に入っているのは液体。ただし、ブレヒト版では、本編の冒頭で、アンティゴネは鉄の壺に砂を集めている。一度目の埋葬では砂で覆い、二度目の埋葬では供養の液体を注ぎに来たが遺体が剥き出しになっているのを見て「砂を集めて」被せ、それから用意してきた液体を注いだのだろう。アンティゴネの嘆きと埋葬についての見張りの記述は若干の変更はあるもののヘルダーリンに従っている。見張りがアンティゴネを見つけたとき、ソフォクレスは、「少女 (ἡ παῖς) が見えました」(S423) とアンティゴネを子供として記述し、ヘルダーリンは “Das Kind” (H241) の訳語を与えているのに対し、ブレヒトが彼女をほぼ無条件では「子供」と呼ばせないことは、アンティゴネを演じたヘレーネ・ヴァイゲルが1900年生まれであることを反映しているのだろうが、クレオンを「王」としないことと並んで興味深い。

ました。娘は私に何も否定せず、愛らしくまた悲しげに私の前に立っていました。(327-351)

クレオン

お前は自分がやったと認めるのか、それとも否認するのか？

アンティゴネ

したと認めます。否定などしません。

クレオン

ならば儂に話せ。長々とではなく短くだ。

まさにこの死骸について国中にどんな布告がなされていたかお前は知っていたのか？

アンティゴネ

知ってました。知らないはずがないでしょう？ はっきりしたものでしたから。

クレオン

儂の布告をあえて破ったのか？

アンティゴネ

それはあなたの布告、死んでしまう人間が出したものの。だから死んでしまう人間が破ったって構わない。私はあなたより少しだけ死に近い。然るべき時を待たずに死ぬと思うのだけれど、だとしても、それはいっそう得なことだと言いましょ。私のように多くの悪に囲まれて生きている人間にとって、死ぬのは少しは利益ではないの？ それに、自分の母親が産んだ子が死んで、片方だけ野晒しなのに何もしなかったら、それは悲しむ羽目になったでしょう。でも、こんなことは悲しくもなんともない。八つ裂きにされた人間が埋葬もされないことを神々は見たくないだろうと思い、その神々を恐れあなたを恐れない、それをあなたが馬鹿だと思うのなら、そう思う馬鹿がいま私を裁いているだけのこと<sup>35</sup>。(352-372)

長老たち

乱暴な父親の乱暴な娘だ。不運の中で身を屈めることも学ばなかった。

クレオン

一番強い鋼でも、炉で焼かれたら砕けて硬さを失う。それはお前も毎日見えていよう。だが、こいつは、定まった法を曇らせてそれを楽しんでおる。さらに恥知らずの二つ目は、やっただけではなく、やった事を自慢し笑っておることだ。現行犯で捕らえられておきながら、それを立派なことに見せかけるなど憎んでも余りある。それでも、肉親でありながら儂を嘲るこいつを、儂は肉親なるが故に、直ちに断罪はせぬ。なので聞いてやろう。お前はこっそりとやったが今やそれは明るみに出た。後悔していると言って厳罰を逃れる気はないのか？ (373-388)

(アンティゴネは沈黙)

クレオン

では言え、どうしてお前はそう強情なのだ。

アンティゴネ

手本になるため。

クレオン

お前をどうしようと儂の勝手だという手本か？

アンティゴネ

私を手に入れたからと言って、殺す以上のことが出来るの？

35 Flashar (1988) 401はプレヒトにおいて、「神の書かれざる法」についての言及が消えていることを強調する。



クレオン

それ以上は出来ぬ。だがそれは出来る。つまり何でも出来るのだ。

アンティゴネ

では何を待っているの？ あなたの言葉は何一つ好きじゃないし、これからも好きになんかならない。あなたも私を嫌っている。他の人が私のしたことを気に入るとしてもね。

クレオン

そう信じているのか。他人もお前と同じ見方をしていると？

アンティゴネ

この人たちもそう思ってる。この人たちも震えてる<sup>36</sup>。

クレオン

勝手に人の心を読んで恥ずかしくはないのか？

アンティゴネ

人は同じ胎<sup>はら</sup>から出た人間を大事にするもの。

クレオン

国のために死んだ方も、お前の血を分けた者であろう。

アンティゴネ

同じ血を分けた、同じ家の子供。

クレオン

ならば命を惜しんだ方は？ お前にはもう一人と同じなのか？

アンティゴネ

あの人はあなたの下男じゃない。それに私の兄。

クレオン

確かに、罰当たりももう一人もお前には同じであるならな。

アンティゴネ

国のために死ぬのとあなたのために死ぬのとは全く別のこと<sup>37</sup>。(389-407)

クレオン

戦争などないと？

アンティゴネ

あるのはあなたの戦争。

クレオン

国のためではないのか？

アンティゴネ

外国を侵略する戦争。兄様たちを自分の国テバイで支配するだけではあなたは満足しなかった。テバイ！ 不安なしに木陰で暮らしていた頃は素敵な国。でもあなたは遠いアルゴスへ兄様二人を引き摺って行き、アルゴスでも二人を支配しなければならなかった。それでその一人を平和なアル

---

36 瀬野（2000）18はこの行（B399）を原テキストに従ってアンティゴネではなく長老たちに帰属させ、アンティゴネとクレオンの「対称性」がなくなることを重視するが、諸刊本は遺稿のタイプ原稿に従ってアンティゴネに帰属させている。Brecht（1992）495参照。アンティゴネがコロスに訴えかけるのは、コロスが自分に共感しているとみなしているためである。

37 ブレヒトでは埋葬の是非ではなく、独裁者に駆り立てられた侵略戦争が問われ、ソフォクレスのテキストから大きく離れる（B407-484）。クレオンはアルゴスの鉱物資源の略奪のために戦争を仕掛けた。

ゴスの屠殺屋にした。怯えたもう一人は八つ裂きにして、自国の民を脅すためにいま野晒しにしている。(408-418)

クレオン

警告しておくが口を出すなよ。自分が可愛ければこれを庇うなよ<sup>38</sup>。

アンティゴネ

では私があなたたちに呼びかけます。私の苦境を助け、それで自分をも助けてください。権力を求める人間が飲んでいるのは塩水だから、飲むのを止められずにもっともっと飲み続けねばならないのです。

昨日は兄様、今日は私。

クレオン

では農の方は、誰がこれを助けるのか見ていよう。

アンティゴネ

(長老たちが沈黙しているので)

ならあなたたちは黙認するんだ。この男のために口を閉じてるんだ。

忘れてもらえると思わないことね<sup>39</sup>！(419-428)

クレオン

こいつは帳簿をつけておるぞ。

我らがテバイの屋根の下に分裂を持ち込もうとする輩だ。

アンティゴネ

あなたは、団結を叫びたてながら争いで生きているのよ。

クレオン

ならば農はまずこの国の争いに決着をつけ、それからアルゴスの戦場だ！

アンティゴネ

そう。よその国に暴力を用いるなら、それから自分の国へも暴力を用いる。

クレオン

どうやらこのお人好しは、農を禿鷹にくれてやるつもりだな。分裂のせいでテバイが敗れ外国支配の餌食になろうが気にせんのか？(429-437)

アンティゴネ

あなたたち支配者はいつでも、国が減びると私たちを脅す。分裂が国を滅ぼし、他人の餌食、外国の餌食にするって。そう言われると私たちはあなたに首を垂れ、生贄を連れてゆく。そして国は弱り切って倒れ、私たちを外国の餌食にする。(438-441)

クレオン

農が国を投げ捨てて外国の餌食に差し出すと言うのか？

アンティゴネ

あなたに首を垂れることで、国が自分を外国に投げ与えている。首を垂れている人間は、自分がどうなるのか見えていない。大地だけを見ている、そしてほら、大地に呑み込まれる。

---

38 以下428行までは両者ともコロスに向けて語る。

39 ここでアンティゴネはコロスがクレオンの味方であることを見てとる。プレヒト版において、若干の揺らぎはあるが、長老たちのコロスはクレオンを積極的に支持してきた。

クレオン

大地を罵り、故郷を罵るがよい、呪われた小娘が！

アンティゴネ

違う。大地とは苦しみ。故郷とは大地だけでも家だけでもない。汗を搾り取る大地でも、火を前に無力な家でもない、首を垂れてしまう場所は故郷なんかじゃない。

クレオン

故郷ではないから守らないと？ ならば故郷はもうお前のものではない、お前は穢れを引き起こす忌まわしい屑のように拒絶される。（442-452）

アンティゴネ

誰が私を拒むのです？ あなたが権力についてから、国の人は減り、これからもっと減るでしょう。なぜ一人で戻ってきたの？ 行く時は大勢引き連れていたわね。

クレオン

何を思い違いしておる？

アンティゴネ

若者たち、男たちはどこなのですか？ もう戻らないのですか？

クレオン

またこの女は嘘を！ 誰もが知っていることだが、最後の一撃で掃討するためにまだ残っているに過ぎぬ。

アンティゴネ

そしてあなたのために最後の悪事を犯すため、そして恐怖となって、結局最後には猛獣のように打ち倒されて、もう父親ですら見分けられなくなるため。

クレオン

こやつ、死者を侮辱しておる！

アンティゴネ

馬鹿な男。言い争いに勝ちたい気にもならない。（453-465）

長老たち

不幸な娘なのです。言葉をいちいち咎め立てしてはなりません。

クレオン

農がいつ、勝利のために払った犠牲を隠したというのだ？

長老たち

だがあなたも、怒りのあまりお嘆きのテバイの輝かしい勝利を忘れてはいけません。

クレオン

だがこの娘、テバイの民がアルゴスの家に住むのは望んでおらん。むしろテバイが滅びるのを見たがっておる。

アンティゴネ

あなたと一緒に敵の家に住むよりは、祖国の瓦礫に腰掛ける方が良いし、安全。（467-475）

クレオン

ほざいたな！ お前たちも聞いたな。この極悪人はあらゆる定めを破る。もう居座れなくなり、二度と戻るなど言われているのに、荷物を纏めるのに愚図愚図とやたら時間をかける厚かましい客のようなやつだ。

アンティゴネ

私は自分のものを手に入れただけ。それだって自分から盗まねばならなかった。

**クレオン**

お前はいつも自分の鼻先だけを見て、神聖なる国家秩序は見えないのだ。

**アンティゴネ**

国の秩序は神聖かもしれない。でも人間的である方が私には良い、メノイケウスの子クレオン<sup>40</sup>。

**クレオン**

失せろ！ お前は我らの敵であったし、あの世でもそうだ。八つ裂きになったあれと同じで、お前のことなど皆忘れる。あれの方はあの世でも見捨てられておるが。(476-486)

**アンティゴネ**

分かるものですか。向こうでのしきたりは違うかもしれない<sup>41</sup>。

**クレオン**

敵は死んでも友になどならん。

**アンティゴネ**

なる。私は憎しみではなく、愛に生きる。

**クレオン**

ならあの世へ行け。愛したいならあっちで愛せ。こっちでは、儂のもとではお前のような奴に長生きはさせない。(487-492)

(イスメネ登場)

**長老たち**

まさにいま、イスメネ様が扉から出てこられた。

平和を望む、愛らしい方だ。

だが、苦しみの血に滲むその顔<sup>かんばせ</sup>を

溢れる涙が洗っている。(493-496)

**クレオン**

そうだ！ お前！ 家の中でこそこそ隠れているお前！ 儂は二匹の化け物、姉妹の蛇を育てたのだな。こっちへ来い。言え。お前もまたこの墓の一件に関わっていたのか。それとも潔白なのか？

**イスメネ**

私も手を下しました。姉がそう認めてくだされば。

私も関わりましたし、罪を引き受けます。

**アンティゴネ**

だが姉はそれを許しはしない。あれは望まなかった。

私もあれを連れて行かなかった。

40 「メノイケウスの子クレオン」という、肩書きではなく父称を用いて個人として同定する呼びかけとともに、再びソフォクレスの世界に戻る。この呼びかけはもっぱらコロスが用い、アンティゴネが用いるのはこの箇所だけである。テイレスシアスはクレオンの無慈悲さを咎める箇所 (B1002) で一度用いている。

41 ここからイスメネの登場まではヘルダーリンのテキストが利用されているが、「儂が生きている限り、女の支配など受けぬ」(S525) というクレオンの言葉は変更されている。ソフォクレスでは男女の支配関係はクレオンの性格を説明する重要な主題で、繰り返し登場するが、ブレヒトでは一貫して削除される。

クレオン

お前らで話をつけろ。儂は小事にこだわる小物にはならん。（497-506）

イスメネ

私は姉様の不運を恥じてはいません。だから今は私を仲間として認めてくださるようお願いいたします。

アンティゴネ

逝ってしまった人たち、地下で語らいあう人たちにかけて、口先で愛する人間は好きになれない<sup>42</sup>。

イスメネ

姉様、反旗をひるがえすことができるほど誰もが立派なわけではない<sup>43</sup>。でもそんな女でも多分死ぬことならできる。

アンティゴネ

そもそもお前が死ぬことはない。関わってないことを手柄にしないで。私が死ぬので十分でしょう。

イスメネ

姉様は厳しすぎる。でも愛してるわ。姉様が亡くなったら、私には愛するものが何か残っているのかしら？

アンティゴネ

クレオンがいる。あれを愛し、あれのもとにいなさい。お前たちとはお別れよ。

イスメネ

もしかしたら私を嘲笑うのが姉様には楽しみなの？

アンティゴネ

もしかしたら苦しみでもあるの。我が苦しみさかずきの杯を満たすことを私は求めているのかしらね？

イスメネ

でも私が姉様に言ったことも、苦しみに入っているのね。

アンティゴネ

あの言葉は嬉しくもあったわよ。でも私は決めたの。

イスメネ

あの時姉様は私なしでやったから、いまま私なしで死ぬ、そういうことなの？

アンティゴネ

しっかりいなさい。あなたは生きるの。私の心は死んでしまった。だからね、私は死んだ人の役に

42 ブレヒトは、ヘルダーリン訳（H247）を変更せずに利用している。ソフォクレスが「誰がなしたことなのかは、ハデス様も、地下でご覧の方々も（Αἰδῶς χοὶ κάτω ζυνίστορες）ご存知です。」（S542）とハデスの名前を出しているのに対して、すでにヘルダーリンは“Bei denen, die durchgängiger Weise sind / Und die Gespräche halten miteinander drunten”と、ハデスの変わりに die durchgängiger Weise sind を補う。この言葉は、ヘルダーリンでは、「逝ってしまった人々」で死者を指すように見えるが、ブレヒトがこの言葉を用いるとき、「志を貫いて亡くなった人たち」の含意も入っているだろう。I, T, Cともにそのように訳する。Ma は who are beyond the world of matter とする。ソフォクレスにおいて問題が死者への弔いであるのに対し、ブレヒトでは独裁者への不服従であることの反映。次行につながる。

43 「反旗を翻すことができるほど誰もが立派（gut genug）ではない」（B512）はブレヒト版に独自のテーマ。

しか立たないのよ、妹<sup>44</sup>。(507-525)

#### クレオン

諸君に言うておくが、この二人の女たち、一人はいまうつけになり、もう一人はずっと前からうつけだったな。

#### イスメネ

この人なしで生きることはできません。

#### クレオン

「この人」など話にならん。そんなものはもうおらぬ。

#### イスメネ

ではご自分の息子の花嫁も殺すのですね。

#### クレオン

耕す畑は一つではないからな。死ぬ準備をしろ。いつ死ぬのかはいま教えてやる。バッコスの舞を舞うテバイが酔っ払って儂のもとへ踊りに来るときだ。

女どもを連れてゆけ。(526-535)

(衛兵がアンティゴネとイスメネを連れて家の中に入る。クレオンは自分の護衛に剣を渡すように命じる。)

#### 一人の長老

(剣を受け取って)

勝利の舞の衣装に身を包むとき、大地をあまりに強く踏みつけても、緑が芽を出している場所を踏んでもなりません。強大な力をお持ちですから、あなたの怒りを買った者からも称賛を浴びるようになさってください。

#### 一人の長老

(クレオンにバッコスの笏杖を渡して)

その者を余りに深く沈めて、

見失うようなことにならぬよう。

地の底まで落ちた者は

そこで不安なく裸で身を休める。

恥などすべて取り去って。打ち捨てられた者は

怯えつつも恐ろしい姿で身を起こす。

人の尊厳を奪われても、かつて生きた姿を思い出し

新しき者として再び立ち上がる。(536-546)

#### 長老たち

ラクミュスの兄弟は、焼け落ちた家で坐したまま耐えていた<sup>45</sup>。

体はかび臭く、苔を食み、冬が絶えることなく彼らに

氷を浴びせかける。その妻たちは、夜は二人の

44 アンティゴネがイスメネのことを「妹 (Schwester)」と呼びかけるのは、劇の冒頭とこの箇所だけである。妹を愛するアンティゴネの真情が露わになる呼びかけ。

45 ソフォクレスの第二スタシモンに対応するコロスのこの合唱歌 (ただしプレヒトの本作の上演は一般的に音楽を伴わない) は、ほぼプレヒト独自のもの。とりわけ、ラクミュスの兄弟たちはギリシアに対応する伝説がなく、完全にプレヒトの創作である。

家にはおらず、昼は密かに緋の衣に包まり坐していた<sup>46</sup>。  
 そしていつも、頭上には崖が脅すようにのしかかっていた。  
 だがそれはペレアスが割り込み、  
 二人を杖打って分けるまでのこと。  
 軽く触れただけだが、二人は立ち上がり、  
 虐待者ども皆を打ち殺した。(547-556)

それが二人には最悪のことだったのだ。  
 しばしば、積み重ねられた悲惨は、ほんの小さな事柄で熟して終わる。  
 絞り尽くされた人々が果てしない時のうちに横たわる、  
 嘆きに満ちた虚ろな眠りにも終わりはある。  
 ゆっくりとそして速く、月の満ち欠けの速さは一様ではないが  
 その間じゅう災いは育ち、すでに  
 オイディプスの家の末裔<sup>すえ</sup>の根を  
 災いの光が照らしている<sup>47</sup>。(557-565)

巨大なものは一人で倒れることはない。  
 大勢を巻き添えにする。ちょうど、ポントスの海で  
 トラキアからの烈風に煽られて、塩辛き海の闇が  
 あばら屋に襲いかかるのにも似て。あばら屋は大地を転がりまわり、  
 打ち据えられた岸辺が嘆きの声を上げる<sup>48</sup>。(566-572)

閣下<sup>たくら</sup>の末のご子息、ハイモン様がお見えだ。花嫁となる娘アンティゴネが破滅して去り、謀みの  
 新床に病み臥しているのをお悲しみだ。(573-577)

(ハイモン登場)

46 “saßen am Tage Heimlich in Windeln purpurn” (B551-552). ピンダロスの『ピュティア祝勝歌』4,5, 113-114) のヘルダーリン訳 (H97) “heimlich gesandt in Windeln purpurn” に基づいている。ピンダロスではイオルコスの王ペリアスを恐れたイアソンの両親が、生まれたばかりのイアソンを「緋の産衣にくるんで秘かに送り出し」ケイロンに渡して養育させた。

47 B563-565は「オイディプスの家で／最後の根を照らしていた光」(S600) に対するヘルダーリンの訳 “Über die letzte Wurzel gerichtet das Licht In Ödipus’ Häusern.” (H250) を引用する。ただし、ヘルダーリンは、「光」を直前の災い (das Übel) と同一視する校訂を用いたが、多くの校訂は、この光を、一族の希望と捉える。その場合、光は「血塗れの砂」で覆われてしまう。

48 ソフォクレスの「ちょうど、大波のうねりが、／トラキアからの烈風に煽られて、／深き海の闇に襲いかかるとき／海底から黒き砂を巻き上げれば、／風吹き荒れる岬が、吠えたる波に／真っ向から打ち据えられて呻きを上げるのにも似て」(S586-592) に対するヘルダーリンの訳 (H250) をほぼそのまま用いる。但し、ヘルダーリンの「あばら屋 (Hütte)」に対応する言葉はソフォクレスにはない。また、ヘルダーリンの「海底から (von Grund aus)」をブレヒトは「大地を (von Grund auf)」に変更し、転がりまわるのが「あばら屋」であることを明示する。ソフォクレスではこの比喩は、神々の呪いを受けた者は一族の大勢を巻き込むことを示し、ブレヒトでは、権力者が倒されるときに国民を犠牲にすることを暗示する。

## クレオン

息子よ、お前が儂の前にやって来たのはあの若い娘のため、支配者としての儂ではなくむしろ父親としての儂にすぎるためだと噂があったが、だとしたら全くの無駄足だったな。多くの血を捧げて上首尾に終わった戦場から帰国したとき、あれ一人が逆らいおった。我らが家の勝利を嫌い、おのれのことだけを、それも悪しきことだけを行なったのだ<sup>49</sup>。

## ハイモン

それでも私が来たのはそのためですし、自分の生んだ息子の声が支配者としては悪い知らせとしても、父親としては不快に聞こえないことを望みます。(578-590)

## クレオン

確かに、生意気な子を生んだら、自分には苦勞の、敵には嘲りの種を生んだとしか言いようがない。酸は口を焼く。だから用いられるのだ<sup>50</sup>。

## ハイモン

父上は大勢の人間を治めておられる。耳あたりの良いことだけを聞くのが良いのなら、そんなに手間をかけて苦勞する必要はないのです。舵取りをやめた水夫のように帆を畳んで漂えば良い<sup>51</sup>。民には父上の名前は恐ろしい。だから、大きな火の手が上がっても、伝わるのはせいぜいボヤだという報告です。でも身内がいて得なのは、欲得ずくで動いてはいないということです。大きな借金でも取り立てはしない。だからこそ私たちはしばしば、親戚から真実を聞くことが出来る。怒っていても、親戚に対しては抑えることが出来るのですから。確かに、父上にそれを伝えることができるのは、メガレウス兄上ではありません。兄上はアルゴスの前線の戦いからまだ戻っていないし、恐怖を知らないのですから。だから私が父上に言わなくてはならないのです。お聞きください。国には不満が渦巻いています。(591-609)

## クレオン

お前こそ聞け！ 国内が腐れば、儂は敵に餌をやっていることになる。覚悟がなく身の程も弁えず、税が嫌だとか兵役が嫌だとか、それぞれ勝手な不満のうちには国の分裂すら潜んでいることも分からぬ輩、そいつらがまとまることなく儂に従っておるのは儂の槍のおかげだ。綻びができて支配が乱れて見え、弱まり不確かになったら、その時にはさざれ石が巖となりて、委ねられた家を押しつぶすことになる。

だが話せ、聞いてやろう。儂が生み、槍兵突撃隊の先頭に立たせてやった息子の言葉だ<sup>52</sup>。

49 以下、クレオンとハイモンの応答は、部分的にヘルダーリン訳が利用されているものの、かなり短縮されている。

50 “Saures Ätzt Gaumen, und drum wird’ s geboten” (B593-595). T. Iはハイモンが「酸」をクレオンに与えようとしていると解する。Flashar (1988) 402はこの言葉遣いが極めて粗暴だと指摘しており、文脈からして、ハイモンの「生意気な」諫言を予測したクレオンが息子を脅し付けている言葉だろう。マリーナの「良薬は口に苦し (The bitter pill cures.)」(Ma593-594) はやや上品に意識した。

51 ピンダロス『ピュティア祝勝歌』1, 90-91「甘美な評判をいつも耳にしたいなら、(89行部分省略) 費えにあまり倦むことのないように。／むしろ、舵取りのように、帆を広げて風を受けよ。」(ピンダロス(2001))のヘルダーリン訳からの借用。ただし、プレヒトは、第二文の「舵取りのように、帆を広げ」を「もう舵取りをやめた水夫のように、帆を解き」とした。

52 ソフォクレスでは、「槍の嵐の中に置かれた時には、正しく優れた戦友として隣に立ち続ける」(S670)のは、家族を最良しない高潔な男であるとされ、槍に対して自分の盾で隣の戦友を守る重装歩兵の戦い方と関連づけられている「槍の嵐」と言う言葉を、ヘルダーリンは“bin der Speere Stürmen angestellt”と訳すが、プレヒトは“den ich vor der Speere Stürmen vorgestellt”と意味を変えて利用す



**ハイモン**

あらゆるもの<sup>あいだ</sup>の間に真実はあるのです。「偽りを許さぬ鉄床で舌を鍛えよ」<sup>かなとこ</sup><sup>53</sup>という言葉があるではないですか。あの娘は、冷酷な犬が自分の兄を食るままにするのを望まなかった。国は、死んだあの男の非行を咎めているとは言え、この点ではあの娘の側にいます。（610-628）

**クレオン**

それでは足りん。儂に言わせれば<sup>たる</sup>弛んでおる。腐った屑を儂が切り捨てる、それだけでは足りんのだ。市場に晒して、儂は屑を切り捨てる、他の屑どもに叩き込まねばならぬ。そうして、我が手が的を違えぬと示すのだ。だがお前は、状況を殆ど知らず、無知のくせに意見しおる。自信なさげに周りを見回せ、他人の考えを探り奴らの言葉で話せとな。ちっぽけで臆病な耳がないと、上の者は難事にあたり大衆を導けぬとでも言うかのような。（629-639）

**長老たち**

ですが、恐ろしい罰を考えるのは多くの力を消費するものです。

**クレオン**

地面を鋤いて掘り起こすには力が要るものよ。

**長老たち**

ですが、穏やかな統治は、容易く多くを成し遂げます。

**クレオン**

統治の形は多かろう。だが、誰が治めるのだ？

**ハイモン**

父上です。父上の子でなかったとしても、私はそう言ったでしょう。

**クレオン**

統治が儂の義務ならば、儂のやり方でやらねばならぬ。

**ハイモン**

父上のやり方で、ですが正しいやり方で。

**クレオン**

無知なくせに、儂に分かっていることなどお前には分かりようもないのだ。

儂が何をなそうと、お前は儂の味方であろうな？<sup>54</sup>（640-648）

**ハイモン**

お味方でいられるように行動していただければ。ですが、正しいのは父上で、他には誰一人いないとは仰いますな。自分だけがしっかりした考えを持ち、言葉も心も他の数多の連中とは異なると思っている人間、そんな人間は中を開けると空っぽなものです。でもどこかに賢者がいるとして、その人は多くを学び法<sup>のり</sup>を躰<sup>こ</sup>え<sup>こ</sup>ないのを恥とはしますまい。ご覧ください、雨で膨れた川が傍らを勢いよく流れてゆく時、撓む木は枝を暖かく守ってくれますが、抗うならば直ちに倒れてしまいます。積荷を満載した船が帆をきつく張って決して緩めないならどうなりましょう？ 転覆して漕ぎ

---

る。プレヒト版では *Stürme* は自軍の「突撃隊」を意味する（AM115参照）ので、ここでは「槍兵突撃隊の先頭に立たせてやった」とする。

53 ピンダロス『ピュティア祝勝歌』1, 86. H76及びピンダロス（2002）118.

54 ソフォクレスではこの問いかけはクレオンとハイモンのやり取りの冒頭に置かれる。「何をしようとも儂はお前の身内（*φίλοι*）であろうな？」（S634）ヘルダーリンは「儂が何をしてもお前は儂のもとを離れまいな？ “Sag oder bleibst / du mir in allem meinem Handeln?”（H252）」と訳すがプレヒトの“Freund”はソフォクレスの *φίλοι* により近い。

手の席を下に旅を続け最後は難破するしかないでしょう<sup>55</sup>。(649-663)

**長老たち**

お譲りください。お心の向かうところに従い、我らに変化を与えてください。人にすぎない我らが躊躇うところでは、我らの心をお汲みいただき、我らと共に躊躇い下さるよう。

**クレオン**

そうなれば馬が御者を御すわ！ それが望みか？

**ハイモン**

車を引く馬も、動物の皮剥ぎ場から腐った肉の臭いが鼻をつけば、どこへ向かわされるかと疑い棒立ちになるかもしれません<sup>56</sup>。それを激しく駆り立てれば、車も御者も道連れに断崖に飛び込んでしまいます。お分かりを。町は疑惑に疼いている。いまこの国は平和のあとの粛清に怯え、戦時だというのにもう狂っているのです。(664-675)

**クレオン**

戦争など終わっておる。ご教授には感謝しておこう。

**ハイモン**

それでも、父上は、勝利の祝いの準備をする一方で、国内で父上の怒りを買った者全員を血祭りにしようとしている、そう言う疑念をしばしば打ち明けられるのです。

**クレオン**

誰からだ？ これはお前に褒美をやろう。儂の疑惑について疑わしげに喋り散らす奴らの代弁者になるよりもずっとたくさんな。

**ハイモン**

その者たちのことはご放念を。

**長老たち**

君主の美德の中で最も尊いのは「うまく忘れること」だと言われております。

古いことは掘り起こさず古いままになさってください。

**クレオン**

儂は古い人間だから忘れるのは難しい。だが、お前は、儂が頼んだら、あの女を、儂に悪意を抱くものがみなこそこそと、「こいつはあの女の戦友らしい」と言うほど露骨にお前が入れ込んでいるあれを忘れることはできんか？ (676-693)

**ハイモン**

私は正しさが示されている側にいます。

**クレオン**

穴がついてる側にな。

**ハイモン**

侮辱されても黙りません。父上が心配なのです。

**クレオン**

それでもお前の閨は空だぞ。

55 このハイモンの台詞の二行目から (B650-663) はほぼヘルダーリン訳 (H254-255) を用いている。

56 T, Iともに、Schidanger (動物の皮剥ぎ場) に「戦場という」との限定をつけるが、ここでは字義通りに解する。

ハイモン

父親の言葉でなかったら、あんたを馬鹿野郎って呼んでいた。

クレオン

女の奴隷の言葉でなかったら、お前を生意気な糞餓鬼と呼んでいたな。

ハイモン

あんたの奴隷になるよりは女の奴隷の方がましだよ。

クレオン

ほざいたな。もう取り消せんぞ。

ハイモン

取り消すことなどないさ。あんたは何でも言うけど何も聞く気がない。

クレオン

もういい。目の前から失せろ。弱虫に相応しく、決断すべき時に愚痴っておれば良い<sup>57</sup>。  
この餓鬼を連れ出せ、今すぐだ！

ハイモン

自分で出ていく。あんたに動じない男を見てあんたが震えなくて済むように。(694-707)  
(ハイモン退場)

長老たち

閣下、怒って出て行かれたのは閣下の末<sup>すえ</sup>のご子息ですぞ。

クレオン

それでもあれは女どもを死から救うことはなかりうよ。

長老たち

では閣下は両方とも殺そうとお考えでしょうか？

クレオン

いや、加担しなかった方は殺さぬ。よく言ってくれたな。

長老たち

もう一人はどのように殺そうとお考えですか？

クレオン

あれは町から連れ出せ。町では今パッコスパッコスの踊りで我が民が足を上げているところだ。あの罪人は、人の踏み入らぬ岩穴に一人閉じ込め、死人に相応しくキビと酒だけを置いておけ。あれが自ら望んで葬られたかのような。

これが儂の命令だ。さすれば我が国全体が穢れを避けられよう<sup>58</sup>。(708-719)

(クレオン退場して町へと向かう)

57 この一文はクールでの初演にはあったが Modellbuch からは落とされた。

58 最後の文はヘルダーリン訳の対応箇所 (S776, H258) をそのまま使用している。

## 文献

ソフォクレス『アンティゴネ』テキストと翻訳

Dain, A and P. Mazon (1955), *Sophocle, vol.1*, vol.1, (Paris: Les Belles Lettres, 72-122. (本稿ではSとして行番号を示す)。

Jebb, R. C. (1900), *Sophocles: The Plays and Fragments, Part III. The Antigone*, (University Press, Cambridge).

ソフォクレス『アンティゴネ』北野雅弘訳、西洋比較演劇研究会編『ベスト・プレイズ2』2020所収。(Sの邦訳は基本的にこれを用いる)。

ブレヒト『アンティゴネ』テキストと翻訳

Brecht, Bertolt (1988). 'Antigonemodell 1948,' in Hecht (1988), 47-165. 本文中に( )で括っている行番号はこの書籍に基づく。ただし、10行毎ではなく、話のまとまりに応じて記述する。注ではブレヒトのテキストはBと省略し行番号を示す。また、Neherの舞台についての記述はAMとしてページ数を示す。

Brecht, Bertolt (1967), *Gesammelte Werke 6: Stücke 6*, Werkausgabe Edition Suhrkamp, herausgegeben von Suhrkamp Verlag in Zusammenarbeit mit Elisabeth Hauptmann, (Suhrkamp Verlag, Frankfurt a.M.).

Constatine, David (2003) 'The Antigone of Sophocles', translated by David Constatine in *Bertolt Brecht Collected Plays: Eight*, (Bloomsbury, London). (注ではCとして必要に応じてページを示す)。

Malina Judith (1984). *Sophocles' Antigone, Adapted by Bertolt Brecht Based on the German Translation by Friedrich Hölderlin and Translated into English by Judith Malina*. (Applause, New York). (リヴィング・シアターの創始者の一人ジュディス・マリーナの翻訳。注ではMaとして必要に応じてページを示す)。

岩淵達治訳 (2001) 「ソポクレスのアンティゴネ：ヘルダーリンの翻訳を底本にした舞台用改作」、岩淵達治訳『ブレヒト戯曲全集別巻』所収、未来社。(注ではIとして必要に応じてページを示す)。

谷川道子訳 (2015) 『アンティゴネ：ソフォクレス原作・ヘルダーリン訳による舞台用改作』、光文社。(注ではTとして必要に応じてページを示す)。

ヘルダーリン『アンティゴネ』のテキストと翻訳

Hölderlin, Friedrich (1946-1952) 'Sophokles Antigonaë', in *Sämtliche Werke, 5. Bd. Übersetzungen*, herausgegeben von Friedrich Beissner, kleine Stuttgarter Ausgabe. (W. Kohlhammer, Stuttgart) (注ではこの書籍への参照はソフォクレス以外にもHとしてページ番号を示す)。

Constantine, David (2018) 'Sophocles' Antigone' in *Friedrich Hölderlin: Selected Poetry translated by David Constantine*, (Hexham: Bloodaxe Books Ltd.). (ブレヒト版の英訳(C)の担当者でもある)。

その他

Cairns, Douglas (2017), 'The Destruction of Thebes in Brecht's *Antigone* (1948)', in I. Torrance (ed.), *Aeschylus and War: Comparative Perspectives on Seven Against Thebes* (Routledge: London), 186-201.

Flashar, Hellmut (1988), 'Durchrationalisieren oder provozieren? Brechts Antigone, Hölderlin und Sophokles' in Ilse Nolting-Hauff und Joachim Schulze (hrsg), *Das Fremde Wort: Studien zur Interdependenz von Texten*, (Verlag B. R. Grüner: Amsterdam), 394-410.

Flashar, Hellmut (1991), *Inszenierung der Antike: Das griechische Drama auf der Bühne der Neuzeit 1585-1990*, (Verlag C. H. Beck: München).

Gesinn, Sabine (2011), *Brechts "Antigone des Sophokles" - Intertextualität als dekonstruktiver Prozess*, (GRIN Verlag: Norderstedt).

Hecht, Werner (hrsg.), (1988), *Brechts Antigone des Sophokles* (Suhrkamp Verlag: Frankfurt a. M.)

- Lehman, Hans-Tier (2015), 'Brecht Translating / Translating Brecht' in Tom Kuhn and David Barnett (eds.), *Recycling Brecht: Das Brecht Jahrbuch* 42.
- Philipsen, Bart (2001), 'Die Kälte weckte sie: Brecht, die Tragödie und die Verleugnung des Politischen' *Weimarer Beiträge*, 41,1.
- Taxidou, Olga (2008), 'Machines and Models for Modern Tragedy: Brecht/ Berlau, Antigone-Model 1948' in Rita Felski (ed.), *Rethinking Tragedy*, (Johns Hopkins University Press: Baltimore MD), 241-262.
- Trilse, Johanaan Christoph (1988), 'Brechts Verständnis der Antike,' in *Hecht (1988)*, 236-244.
- Weisstein, Ulrich (1973) 'Stylization, and Adaptation: The Language of Brecht's Antigone and Its Relation to Hölderlin's Version of Sophocles' *The German Quarterly*, 46.4, 581-604.
- ゲーテ (1962) 『西東詩集』 小林健夫訳、岩波文庫。
- ピンダロス (2001) 『祝勝歌集／断片選』 内田次信訳、京都大学学術出版会。
- 瀬野晶子 (2000) 「アンティゴネー・モチーフ-ブレヒトの『アンティゴネーモデル 1948』を中心に」 北海道大学独語独文学研究年報27、14-24。